

アル?

はたらく×英語



無料アプリ!!
音声DL&再生が
スマホでできる!

翻訳 スキル ハンドブック

駒宮俊友 著

英日翻訳を中心に

英語から日本語へ

翻訳のコツ、
スッキリ
まとめました!

翻訳者を目指す人から品質向上に悩む人、
ビジネス・ライティングがうまくなりたい人まで
実践的な78のスキルから学べる「翻訳作業の勘所」

品質向上に活用できる「翻訳チェックポイント表」付き



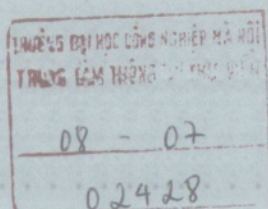
アルファ

はたらく×英語

翻訳 スキル ハンドブック

駒宮俊友 著

英日翻訳を中心に



アルファ

はじめに

数ある翻訳関係の本から、本書を手にとっていただき、ありがとうございます。翻訳者の駒宮俊友といます。現在は法律やビジネス、ニュース、字幕などの分野で翻訳を行っています。また、大学の生涯学習プログラムのコースや、アートギャラリーの字幕ワークショップで翻訳スキルを教える仕事もしています。



本書は、主に英日翻訳の作業過程（プロセス）と、各過程で求められるスキルを手軽に学べるハンドブックです。多彩な例文や訳例を通じて、英日翻訳の作業に必要なスキルを身に付けられるように工夫しました。なお、これらの英語例文は、英語のネイティブ・スピーカーで、なおかつクリエイティブ・ライティングを得意とする人々の協力を得て作った、本書のオリジナルです。

この一冊で、新人の翻訳者や、翻訳を学ぶ学生、あるいは社内翻訳を頼まれる機会の多いビジネスパーソンに役立つ知識やスキルを学べます。また、翻訳という枠組みを超え、さまざまな職業や背景を持つ読者にも役立つ「日本語の表現力」や「リサーチ力」、そして「英文の分析力」などの技術も学ぶことができる内容になっています。

それでは、各章の概要をご紹介します。

本書の第1章「翻訳者に求められるスキルとは」では、翻訳の仕事に必要な5つの基本スキルの概要を説明します。

第2章「翻訳のプロセスと基本スキル1 原文分析スキル」から第7章「翻

訳のプロセスと基本スキル5「校正スキル」では、第1章で紹介した「原文分析スキル」「リサーチスキル」「ストラテジースキル」「翻訳スキル」「校正スキル」について、具体的に、かつ丁寧に紹介していきます。

第8章「納品時の注意点」では、校正チェックを終え、いよいよ納品する段階で気を付けたいことをまとめています。

第9章「より良い翻訳のためのヒント」は、第1章から第8章までの翻訳作業の基本を踏まえた上で、さらに高品質の翻訳を目指すためのポイントを示しています。

第2章から第9章の各節の冒頭には、作業時にすぐ参照してもらえるようにポイントをコンパクトにまとめてあり、クイックリファレンスとしても活用できるようになっています。そして、時間があるときには、じっくりとそれぞれのスキルを学習できる構成になっていますので、ぜひ目を通していただければと思います。

また、参考までに、本書の中で登場する英語例文の日本語訳を第9章の後ろに掲載しています。力試しも兼ねて、ぜひ英日翻訳にもチャレンジしてみてください。

巻末付録では、翻訳作業の際に役立つ「翻訳チェックポイント表」と、「翻訳に役立つ参考文献・辞書」を紹介しています。

「翻訳チェックポイント表」は、実際に私が大学で学生に配布しているものです。さらに、「翻訳に役立つ参考文献・辞書」では、書籍とオンラインソースをあわせて掲載しています。



本書を読み進めていただく前に、まずは皆さんに、次の一文を日本語に訳していただこうと思います。うまく訳せなくても全く心配ありません。気軽な気持ちで挑戦してみてください。もちろん辞書やインターネットを利用しても構いません。

Optimists can cope more effectively with stress.

上記の文章は、大学の翻訳クラスで実際に出題した問題です。「楽観的な人は、(悲観的な人に比べて)ストレスにうまく対応できる」という意味合いの文章です。勉強を始めて間もない学生たちに訳を提出してもらおうと、たとえば次のような日本語訳を見かけることがあります。

楽天家は、ストレスをより効果的に処理することができる。

訳自体はそれほど悪くありません。ただ、直したほうが良い箇所もいくつかあります。中学英語の「英文和訳」のように、硬い日本語になっているのも気になるところです。次に、私の訳例を紹介します。

楽観的な人間ほど、ストレスとうまく付き合える。

いかがでしょう。最初の日本語訳と比べて、ずいぶん印象が異なると感じるのではないのでしょうか(両者の違いはなぜ生まれるのか? という点は、第1章で詳しく説明します)。

両者の訳の違いは、「英文和訳」と「翻訳」の違いともいえます。実際の仕事では、「意味は何となく分かるけれど、読みづらく、違和感のある」翻訳は、商品になりません。原文の意味をしっかりと伝え、なおかつ読みやすい訳文であることが求められるのです。

「翻訳とは、どんな仕事か？」という問いを考えた場合、教科書にしか登場しないような、いかにも不自然な日本語ではなく、日常や実際の仕事現場で使われる自然な表現の訳文を生み出す作業であると、ひとまず定義することができます。翻訳者が目指すべきレベルは「英文和訳」ではありません。読む側が「翻訳された文章」であることを忘れるほどに自然な訳文をつくるスキルが、翻訳者には必要になります。



先ほどの訳例ですが、私にしかできない特別な仕掛けや工夫は一切ありません。本書で紹介する基本スキルをしっかりと身に付ければ、皆さんも同じように翻訳することができます。

「翻訳は『語学の才能』がないとできない仕事だ」という意見を耳にすることがありますが、その点について私自身には多少疑問があります。才能があるに越したことはありません。ただ、すべての翻訳者に特別な語学の才能があるかということ、果たしてそうだろうか？と首をかしげたくります。

今では翻訳者として仕事をしている私ですが、英語にはもともと苦手意識がありました。高校時代の英語の成績も下から数える方が早かったほどです。当時は、まさか自分が将来翻訳という仕事に携わるとは、1ミリも想像していませんでした。

私が「翻訳者」という仕事を意識し始めたのは20代半ばの頃です。

ジョナス・メカスというリトアニア出身の映画作家がいるのですが、ふとした思い付きで、彼の英語インタビュー記事を訳してみようと思ったのがきっかけです。出版社に持ち込む予定もなく、単に趣味として翻訳に挑戦してみた、という感じです。

そんな軽い気持ちで始めたのですが、いざ訳し終えると、メカスを好きな（そして英文記事を読めない）友人たちの感想も聞いてみたくなり、訳したインタビュー記事を彼らに渡しました。今から考えると翻訳と呼ぶには程遠い、まさに「英文和訳」の日本語訳だったと思います。それでも彼らから「面白かった」という言葉を聞いた時の感覚は、それからずいぶんと月日の経過した今でも、よく覚えています。少し大げさな言い方ですが、「自分の翻訳を他人に喜んでもらえた」という経験が、その後の進路を決定したような気がします。

「翻訳者になりたい」と周囲に伝えた時は、私の英語の不得意さを知っている友人たちに驚かれました。それでも、どうにか翻訳の勉強を続け、現在まで翻訳の仕事に従事してきたことを考えると、「すべての翻訳者に『語学の才能』がある説」は少し怪しくなってきます。

むしろ翻訳者に不可欠なのは、「最適な考え方」を学ぶことです。ここでの「最適な考え方」とは、「理想的な訳文をつくるのに必要なプロセスを知り、翻訳作業中に現れるさまざまな問題を、適切なスキルで処理するための思考」を意味しています。

翻訳は、練習を重ねるほど上達します。勉強をした分だけ、スキルアップが約束される仕事なのです。ですから、自分の才能の有無に悩むだけの時間は、あまりにもったいない。その時間を「最適な考え方」の学習に充てるほうが、よほど生産的で、翻訳スキルを上達させる近道になります。本書では、こうした「最適な考え方」を多様な視点から読者にご紹介していきます。

私は、海外の大学院で翻訳学（Translation Studies）を学んだ経験があります。一般にはなじみのない学問名かもしれませんが、ごく簡単にいってしまうと「翻訳に関するさまざまな現象を研究する」という懐の広い研究分野です。言語学はもちろん哲学、認知科学、社会学、IT、医療など広範なジャンルの知識を応用しつつ、翻訳について幅広い観点から検討していく学問になります。

す。本書の内容は、こうした翻訳学の知見や、翻訳者としての私の経験、そして大学でのクラス／学生とのディスカッションを通じて得た着想に基づいて書かれています。



本書は英日翻訳のためのハンドブックです。じっくり机に向き合い一気に暗記するタイプの書物というよりは（もちろん、そうした学習方法にもお使いいただけますが）、職場や学校で翻訳作業を進める際にも、手軽に参照できる構成、内容となっています。『翻訳スキルハンドブック』というマップを片手に、それぞれのゴールを目指して進んでいく。そうしたイメージをお持ちいただければ幸いです。

本書を通じて、翻訳に関心のある人、翻訳で身を立てたい人、仕事で翻訳に携わっている人のお役に立てれば幸いです。

2017年12月

駒宮俊友

